

「支配人！ 新人黒服の研修スケジュールを作りましたんでご確認ください」

「ああ、ありがとう」

事務担当から受け取ったスケジュール表。来月から入る三人の黒服の履歴書と嗜好が書かれた紙を照らし合わせて内容を確認する。

（ん？ ああ……これはすごいな……）

三人のうちの一人は、どうやら博物館で一番ハードだと言われている諏訪と同じような趣味を持った人間らしい。

（どうするかな……）

諏訪と千尋はとにかく相性がよかった。それに諏訪も千尋にぞっこんで、だからこそ四肢の欠損までできた奇跡に近いペアだ。

（そこまで持っていけるか……）

まずは黒服としての展示品の愛し方を学ばせなければならぬ。しかし四肢の欠損を目指すとなると普通に教えるだけでは足りない。本人の気質も大きく関係する内容だ。

（研修担当は……）

書かれていた名前を見る。性格もいいし、教え方も丁寧で上手い人間だった。しかしそこまでハードなタイプではないので研修生を欠損まで導くのも、本人にそこまでの気質があるのかを見極めさせるのも少々難しそうだった。

「すまない。この研修俺が代わる」

「え……支配人と夕さんですか」

事務担当は書類を見ながら首を傾げた。

「ああ。夕には俺から言っておくから」

「分かりました。でも夕さん引退されたんじゃ……」

「大丈夫、帰宅したらすぐに伝えておくれ、仕事は好きだったから」

思い浮かぶのは今朝「行ってらっしゃい」と笑ってくれた顔だ。もうここには長いこと連れて来ない。

「支配人がそうおっしゃるのなら……宜しくお願いします」

夕と出会ったのは、もう十年近くも前の話だ。

あの頃はまだ二十歳になったばかり。普通の風俗では十八歳以上から可能だが、ここでは手術を必要とすることも多いので二十歳を一つの区切りとして使っていた。

どこからか噂を聞きつけたという夕は、何日も何日も博物館に通い詰めていた。と言っても入館許可のない夕は中に入ることもできず毎日ビルの前に立ち、どうしても働きたいのだと出入りする黒服に頭を下げ続けていたのだ。

当時はまだ藤永も支配人という立場にはなっておらず、研修を終えて後はパートナーを探すだけという段階だった。そこでお互い、魅入ってしまった。

しかし路上でそのまま「はい採用」とするわけにはいかなくて、まずは夕の背後を探る必要があった。本来噂にもならないはずの博物館の存在が一体どこから漏れたのか。万が一司法関係のスパイだとまづいこともある。いや、合法的にやっていると認識はしていたけれど、政府関係者も博物館の客にはたぐさんいたので情報が漏れているとしたら問題だった

しかしどれほど探しても、夕の周りに危険な関係は見られなかった。早く声を掛けたい、パートナーにならないかと声を掛けたい——そう思いながらもどうしても博物館と夕の繋がりが見えなくて、焦る気持ちを抱えながらもビルの前で顔を合わせるだけの日々が一月も過ぎた頃、先輩からのお墨付きをもらって——お前まだパートナーいないだろ？ 別にスカウトだっていいんだ。とにかくMで、いやらしい子かどうか確認して来い。背後には何もなさそうだから——喫茶店に連れ出したのだ。

しかし後押しした当の本人は夕とのその後も確認せず、展示品であったパートナーと田舎で生活すると言ってその後すぐに退職してしまった。言い逃げだ、と思うけれど、きっと藤永を信用してくれていたのだろう。面白くて優しい先輩だったな、と懐かしく思う。

そんな風にして夕と出会い、ともに話したのは喫茶店でのその時間が初めてだった。

「Mなんです」

「……展示品として働きたいと思う方は大抵Mでしょうね」

「いえ、その……普通のMじゃないっていうか……」

「お聞きしても宜しいですか？」

「……あの……色んな人に見られたいんです」

「それは……展示品としては普通の業務ですが」

「色んな人に見られて……身体を解説されて……それで、でも愛されたいんです」

夕が博物館の内情を一体どこまで知っているのか、それを探るのも藤永の仕事の一つだった。先輩は大丈夫だと言っていたけれど、どうして夕が博物館を知っているのか、その謎は解けていなかった。

「どこまでご存知かは分かりませんが、手術の件は？」

「あ……あの……はい、亀頭、とか……」

夕は店内を見回してから小声で言った。でもこの店に客がいるのを藤永は過去一度も見ることがない。先輩から面談に使うといいと教わったこの店は、もしかしたら博物館の息がかかった店なのではないかと薄々感じ始めていたところだ。

「はい。亀頭だけを残して切除する亀頭のみや、亀頭だけを切り落とす亀頭なしもあります。でも一体、どんなものをご希望なんでしょうか」

年齢は藤永より六つ下。二十歳になったばかりだと聞くとやはり子供だなと思ってしまうけれど、あれだけ通い詰める根性があるのだからやる気はあるに違いない。それなら誠意を持って対応をしたかった。

「色々なんです……むしろ全部、かな……身体中を好きにされたいんです」

「身体中を、ですか……」

研修では展示箇所を決める際の流れや注意事項も学んでいたけれど、さすがに全部と言う人がいるとは聞かなかった。むしろ大切な性器を失う恐怖心への寄り添い方と、その励まし方、最終的に決断させる方法を学んだような印象だ。

「はい……おかしいですよ……あ、でもその、亀頭のみと亀頭なしのどちらもが無理ってことは分かっているんですが……可能な限り身体を使ってほしいんです」

切羽詰まった様子は見られなかった。中には金欲しさに身体と言う人もいるので注意するようにとは言われていたが。

「……失礼ですが、どうしてそこまで？」

「本当に……その、M……なんです……普通の身体では満足できないっていうか……」

「恋人がいらっしゃるんですか？」

「いえっ！ その……思春期にオナニーを覚えてから……ずっと身体を改造されたり弄られたり、というのを妄想……して……お恥ずかしいんですけど……なんならネット中継されたいとか、そういう願望まであって。とにかくいやらしく改造された身体を皆に見られて、色々言われたくて……もうそういうのじゃないとイけなくて……」

「……ではまだ童貞、ですか」

「はい……。その……普通にしようと思っても、多分無理なんです。セックスしているのに頭の中では別のことを考えているなんて失礼だって思ったら……」

その必死さといじらしさに胸を打たれた。そして瞬時に自分のパートナーはこの子しかないのだと悟る。

「……分かりました。私に嫌悪感はない？」

「いえっ！ むしろその……あの、藤永さんがいいって……もし藤永さんが……って、名前をお聞きしたのもさつきですけど……あの……もし藤永さんがすでにパートナーがいるとか僕が好みじゃないとかなら僕はもうずっと一人でいようって思っていました」

そこまで思ってくれていたのか、とまた胸が熱くなった。ほとんど会話をしたこともなかったのに、雨の日も雪の日も藤永のことを考えながら立っていたのだ。

「どうしてそこまで……」

「……ココア、美味しかったです」

「あ……」

そうだ。そんなこともあった。まだ夕がビル前に立つようになってすぐの頃。その日は夕方から大雪になって、ニュースでも首都圏の大雪ということで大々的に取り上げていた。交通もストップするとうことがすでに決まっていたのでまさかいないだろうと思いつながら外に出ると、夕はそこにいたのだ。身体を雪で真っ白にして、それでも話を聞いてくれる人を待っていた。

そのときに自販機でココアを買ってあげたのだ。

「……でもそれは……だから私がいいと思ってしまうただけでは？」

つらいときに優しくされるとなるとなくほだされてしまうということは一般的によくあることだ。きつとその条件に合致してしまっただけだろう。

「いえっ！」

しかし夕は全力で首を振った。そんなに振ったら眩暈がするのではと思う程に強く、ぶんぶん。

「あの……実は、他にもいたんです。飲み物を買ってくれたりお菓子をくれた方が。でもやっぱりその……僕は藤永さんがよくて……」

その発言こそ、弱っているときにつけ込むようなタイミングだった。藤永自身がいいなと思っている夕がもしかしらたらたった一本のココアにほだされていただけかもしれない——そう内心で落ち込んだ瞬間の嬉しい台詞。でも、そこまで夕が言うのなら逃がすなんてできなかった。

「……分かりました。では……次回の体験展示に招待します。しっかりと展示品を見て、それで決めましょう」

本来はパートナーを決める前に博物館を案内するのがルールだった。こうしてここで盛り上がりつつもいざ現実の展示品を見て怖気づかれるとまずい。内部を知られたからにはそのまま放すことはできないのだ。

「嬉しいです……！ やっと……」

そんな心配をよそに、夕は目を潤ませた。きっと体験展示会への招待が展示品への第一歩だと知っているのだろう。一体どこから噂を聞きつけたのかは分からないが、自分好みの展示品にしてみせると心に決めた。

「これが……亀頭のみ、ですね……」

「はい。こちらが亀頭のみ、隣が亀頭なしです」

「すごい……いやらしい……あの、どんな風に説明をされるんですか」

夕は自分がMで展示品になりたいと言いつつ切ただけあって、展示品に触れて楽しむつもりはないようだった。むしろ展示品としての在り方やどんな扱いをされるかに興味に向いている。

「今日は体験展示ですので本来のパートナーがおりません。ですので一般的な説明しか私にはできませんが……」

通常客に説明するのはパートナーである黒服の仕事だ。恋人であるからこそ、その展示品の身体について詳しく説明をすることができる。しかし藤永は目の前の展示品のパートナーではないので、そこまで詳しい説明をすることはできない。

「はい。大丈夫です。どんな説明でも……いえ……もしこの亀頭のみが僕だったら、藤永さんはどのように説明してくれますか」

会ったのは喫茶店で説明をしたとき以来だ。そのときに連絡先の交換はしていたのでたまに電話でやりとりはしていたけれど、それだけなので当然夕の身体のこととはまだ何も知らない。

「そうですね……亀頭の大きさの説明から始めるかもしれません。直径何センチ何ミリと細かく測り、円周についても説明するでしょう。本当はどんなプレイが好きかも説明したいところですが、展示品には好みも何もないですからね」

「わ……すごい……自分でも知らない亀頭の大きさを、藤永さんに測られて会ったこともない人に知られてしまうんですね……」

「そうです。恋人に自分の身体を説明されて、更には触るように勧められてしまうんです」

「あっ……すごい……」

夕はうつとりとした顔を見せた。視線を顔から下に向けると、でもそこは平らなまま。

「感じているのは顔だけですか」

「あ……いえ……勃起……したいですけど……僕今貞操帯をつけているんです」

「貞操帯？」

展示品を見ながら勃起してしまうのが恥ずかしいからだろうか。でもここではそんなことは当たり前だ。だからこそ抜歯オナホが用意されている。

「はい……その……僕本当に藤永さんと恋び……パートナーになつてほしくて……もしかしたらやっぱり無理って言われちゃうかなとも思ったんですけど、もしパートナーになつていただけのなら、もう僕の身体は藤永さんのだから……だから自分で触ってしまわないように……それに、リセットのためにつけてるんです」

「リセット？」

健気な言葉に嬉しくなるが、今は仕事中。にやけるわけにはいかなかった。

「はい……その、僕本当に誰にも触られたことがなくて。自分でしかしていませんので、自分好みの触り方ができちゃってるんです。もしかしたらもうその触り方じゃないとイけない身体になっちゃってるかもしれないと思つたら怖くて……それなら一度全部忘れて、一から藤永さんの好みの身体にしてほしいなつて……手術で見た目だけ好みにするんじゃないかって」

ため息が漏れそうになった。まさかここまで献身的なMに好いてもらえるとは。

「痛くないですか」

「痛いですが……すごく……寝ている間とかも痛くて起きちゃうんですけど、でも今はあんまり寝たくなくて……だから目が覚める度によかつたつて」

「寝たくない？」

眠れないならよく聞くが、寝たくないというのはほとんど聞いたことがない。一体どういうことなのかと問うと、夕は顔を赤らめた。

「……寝るの、もつたいなくて……ずっと藤永さんのことを考えていたくて……すみません、重いですよね……」

くくく

それから博物館内を全て見て回った。でも夕はどの展示品にも触れることはなく、ただその説明を聞き、楽しそうに顔をほころばせた。きっと自分に置き換えていたのだろう。

「ではこちらにお座りください」

ルートの最後にある相談コーナー。対面に座り、机にパンフレットを広げる。

「具体的に展示箇所を決めるのはまだ先ですが、今のうちに訊いておきたいことなどはありますか」

「あの……その、僕とにかくたくさん見られたいんです。でも……その、見られているところも見たいというか……展示コーナーも体験コーナーも、トイレとかも全部自分が見られているところは見れないですよ」

「そうですね……」

夕の言う通り、客のプライバシーを守るためにも、展示に集中してもらうためにも見えないようになっていし、可能な限り声も聞こえないようにされている。しかし、一つだけ方法はあった。しかも藤永の趣味にも合致する、最高の方法。しかし夕は——誰とも経験がない夕はそれを受け入れられるだろうか。

「……僕……自分の身体がどんな目で見られているのか、」

「方法は……ないわけではありません」

「……え？」

夕の瞳が揺れている。興奮か、期待か。

「ですが……一般に展示されるものではありません」

「それは……どういう……？」

「黒服の研修用の教材です」

「きょう……さ……」

繰り返される瞬き。でもその顔に、拒絶感は見られなかった。

「はい。私たち黒服は展示品とペアになる前に研修を受けています。展示品の扱い方や、術後のケアの仕方等ですね。それを実際の教材を用いて学ぶのです」

「……それは……その、研修生と教材のペアで……？」

「ああ、いえ、それは違います。見本って言うんですかね、研修は数人一度に行うのですが、そのとき前に置いて、実際に触れたりカメラに映したりして使います」

「あ……すごい……」

「なので、自分がどのような姿勢でどこをどんな目で見られているのかも分かります」

「すごいです……そんなものが……」

夕の目が興奮に勇んでくる。きっともう、教材になりたくて仕方がないのだろう。

「ですが……教材になるためには事前の研修も必要なのでかなりの時間がかかります」

「はい」

「どうやらそれは構わないらしいと判断して説明を続ける。

「手術部位は私と決めることになりましたが、他の展示品のように自由に決めることはできません。そのときそのときで教材や展示品の不足部位を補うために身体を使うこととなります」

「……はい」

「それから、研修については——そうですね、例えば亀頭のみ研修をする場合、まずペニスを亀頭のみに変えます。術後すぐからケアの内容を学ぶ黒服の教材として使われ、身体が回復し、感覚が戻ったあとで実際に亀頭のみを所有している黒服が教材の身体を用いて研修を行うこととなります」

「え……それは……僕の身体を使って、ということですか？」

「はい。私はまだ誰ともペアを組んでいませんので、だいたいの知識しか持っておりません。やはり専門的な知識を持っているのは実際に展示品と組んでいる黒服ですので。その研修を私自身も見て学び、私も研修担当黒服になっていくんです」

「だから、まずは夕の身体を教材として『貸出』することになる。

本来黒服は自分の展示品を他のスタッフに触らせることはしない。恋人関係である上に、そもそも黒服は独占欲が強い傾向にあるからだ。つまり教材になることを認める黒服自体少ないので、教材はいつでも足りていない。だから夕が教材になることを望めばすぐにでも許可は下りるだろう。

それにさっき手術箇所を自由に決められないと言ったけれど、今なら何の教材でもなり放題だ。しかし如何せん教材が足りていないので複数か所の教材になる必要がある。使える限り、全てを使わなければならぬ。

「じゃあ、二人で教材としての研修を受けるようなものなんですわね」

「はい、そうなります」

「時間が経ったら……研修に慣れたら、その……僕の身体を藤永さんが教材として使ってくださいる……ように？」

「はい。私たちが研修を受けている間も、家ではたくさん愛し合って身体を詳しく知っていくんです」

「あ……うれし……僕、教材になりたいです」

「本当に？」

「はい」

「……分かりました。ではその方向で上には話をつけておきます」

きつと夕を喫茶店に誘うように言った先輩は藤永と夕の属性を見越して言っていたのだろう。

(他の黒服が夕の身体を……)

想像するだけで股間に血が集まり始める。自分以外の人間が、藤永の恋人の身体を使って学んでいく。それを夕自身も望んでいる。

「……では、引越しいつにしましょうか」

「確認したところ、今はどの教材も不足しているからどこを弄ってもいいとのことでした」

「……あの」

「はい」

同棲三日目。荷物の片付けも粗方終わり、夜にはゆったりとココアを——藤永はコーヒーだけけど——飲む時間が持てるようになった。

「ずっと敬語……なんですか」

「ああ……そうだね。もう一緒に住んでるんだしいいか」

「あ……かっこいい……」

「えっ」

「かっこいいです……」

夕はよく分からないところでときめくタイプだった。最初こそ驚いたが、今では何に対してもカッコいいと言ってくれるし嫌味も感じないので悪い気はしない。

「……夕。キスしようか」

「あ……ん……」

素直に傾けられる顔。伏せられる脛。素直で、従順。それが可愛い。しかしいつまで経っても唇が触れないことに、夕は目を開けてしまった。

「……藤永さん？」

「ごめん。キスを待ってる顔が可愛くて」

「やっ……恥ずかしいです……」

伏せられた顔。上から見ると睫の長さが更に際立つ。

「夕こそ敬語だね。もういいでしょう」

「あ……でも……」

「ほら、それにもう苗字もおしまいだよ」

「ン……篤さん……」

初めて呼ばれた名前。その呼ぶ声すら愛おしい。

「夕……可愛い」

くちゅ、と音がするキス。舌で唇を舐めると夕の身体がピクリと跳ねた。

「まだ舐めただけだよ」

「や……だつて……」

身体はいやらしいのに心は初心だ。全てが魅力的で困る。今までたくさんいやらしいオナニーをしてきたそうだけれど、こんなに初心な子がどんなオナニーをしてきたのか、過去を覗いてみたくなる。

「可愛い。でもほら、慣れないと」

「ん……」

先程より強く瞑られた目。唇にまで力が入ってしまったのが見て取れた。可愛くてつい虐めたくなってしまう。

「……え？」

触れるだけのキスを一つだけで顔を離す。それも触れたのはたった一瞬。すると夕はパチパチと瞬きを繰り返したあと頬を膨らませた。

「可愛いな。リスかな。ハムスター？」

「人間です」

「そうだね、まだ人間だ」

~~~~~

「夕、うんちだよ」

「はい……お腹苦しい……」

膨満感から身体を動かすのもつらそうな夕の腕を取りダイニングに向かう。

夕はぼこりとしたお腹をまるで妊婦のように手で支えて歩いた。

「一週間よく我慢したね」

夕のお腹は一週間分の便で大きく膨らんでしまっている。排便してしまわぬようプラグをはめた状態で過ごさせると、最初のうちはもじもじしていた夕も三日を過ぎた頃から膨満感により食欲を失い始めた。しかしそれでは練習にならないので、そんなときは口移しという方法をとってでも無理矢理食事を取らせ続けた。

「もう出したいっ……お腹割れちゃう……」

「うん、苦しそう」

お腹を一撫でして慰め、それから身体を支えてやってダイニングテーブルに上がらせる。言わなくても、夕はきちんと四つん這いになってこちらにすっかりアナルを向けた。

「ああ、お尻も緩んできてる」

「やあ……出したいい……うんちいい……」

プラグを咥えたアナルはとてもしゃらしい。大きなプラグだというのに、しっかりとひくついているのを見てとれる。

「うんちしたいね」

「んっ、したいっ！ うんちしたいい！」

けれどすぐには出させない。まずはじっくりとそのひくつくアナルを観察し、息を吹きかけ、赤く色付いた部分を指先でなぞり、舐める。

「あっ」

唾液を乗せた舌で舐めれば、アナルと口を糸が繋ぐ。それを吸い取るようにしながら、今度はアナルとプラグの境に舌をねじ込むようにして刺激する。

「あああ！ だめ、だめえっ！」

きゅっつと締まったアナル。硬くて舌は差し込めない。それなら、と他の方法で可愛がる。

「この奥にうんちがあるね」

「やあっ！」

すぐそこまで便が来ている。それを意識させた状態でのアナル舐め。夕は泣きそうな嬌声を上げた。

「や、やあんっ！ ああっ！」

ふるふると震えるお尻も可愛いし、便意を堪えるためにきゅっつとしまったお尻も可愛い。アナルだけでなく会陰も舐め、それからだらりと垂れた陰囊を揉んだ。恐らく便意と腹痛が強すぎて絶頂には近付けないのだから。

「うんち出そう？」

夕は「ん、ん」と何度も首を振った。つらそうだ。

(そろそろいいか……)

最後にもう一度アナルを舐め、それからプラグを引き抜きシリンジでお湯を注入する。ゆっくり、けれど大量に。こうすることでフルーツが入った状態で水分を足される感覚に慣らすのだ。

「あっ、ああっ！ 苦しいっ」

「そうだね……でもあと二本だよ」

今使っているシリンジは一本二百五十ミリリットル。これを三本入れられるようにならなければなら

ない。

「ううう……」

「お腹苦しいね。うんちでいっぱいなのに……ああ、お腹がすごく膨らんでるよ。俺の子供妊娠したかな」

「あつ、だめっ」

四つん這いのせいでさらにお腹は大きく見えた。二本目の注入を終えたところで腹を撫でる。

「可愛い……顔が童顔だから幼妻みたい。こんな若くて可愛い子妊娠させちゃったのかな」

「あつ、あつ……だめっ、出ちやうつ」

ダイニングテーブルの上で我慢をさせるのは夕を追い詰めるためだ。ここなら嫌でも我慢を覚えられし、万がここで漏らしてしまうようなら次はキッチンの作業台ですればいい。

「可愛いお腹、写真撮りたいな。あ、一本入れることに膨らみを確認すればよかったね」

「ああっ……もうっ、もう出ちやうつ……」

一週間も排便していないというだけでお腹はすでに限界だろう。けれどまだ、もっと我慢をさせたい。

「あれ、暑い？ 汗かいてるよ」

きつと腹痛による冷や汗だろう。でもそんなことは無視して汗の垂れるこめかみを舐める。

「あつ……ああっ……ダメえっ……」

つらそうなのに可愛い声を上げる。

「うんち出ちやうつ？」

「んっ、出るっ、出ちやうつ」

「ダメだよ。まだあと一本入れないと」

一週間の便とお湯五百ミリリットル。いつ決壊してもおかしくないが、夕は懸命に耐えていた。

「やああっ……もう入らないっ」

「入るよ……でもすごく苦しいね」

入れるなら早く入れてやった方がいいだろう。けれど客の中にはゆっくり時間を掛けて楽しむ人もいるのだ。それに実際のジューサーで使うのは冷えた飲み物とフルーツ。今のようにお湯ではないから更につらい。

「うう……苦しいっ……お腹壊れちやうよお……」

「うん……壊れたらどうしようか。毎日治るまでずっとお腹とお尻を撫でていようか」

「あつ……ああ……言わないでえ……」

「夕？」

本当に限界なのだろう。涙がツーンと頬を伝った。

「やだぁ……そんなこと言われたら壊れなくなっちゃおう……」

「……夕……」

思いがけない言葉だった。変なことを言っていないで早く入れるなり何なりさせてくれとでも言うのかと思っていた。そしてもしそう言われたら、夕の性格を考えれば本当の限界だということだろうからと、出させてやろうと思っていたのに。

「ううう……」

夕はつらそうに涙を零した。その切ない様子に胸が苦しくなる。

(可愛い……)

どうしてこう可愛いのだろう。つらいと泣き、壊れてしまうことに恐怖を覚えながらも撫でられたいがために壊れたいと望む。

「ううっ……ううう……」

でもこれで夕がどのタイプのMなのかがよく分かった。世話をされ、甘やかされたいタイプだ。

「……夕、このままお腹ダメになっちゃうの待ってようか。大丈夫だよ。もしここでお腹が壊れてうんちがお尻から飛び出しちゃっても俺が全部掃除してあげるから。身体も丁寧に洗ってあげるし、テープルだって舐められるくらい綺麗に掃除してあげる」

「あああっ……ダメっ……ダメえっ……」

夕の想像力が巧みなのはもう分かっている。それに妄想することで更に感じやくなってしまうことも。だからあえて想像させる。

「ああ……そうだ、もし夕が壊れてしまっても『トイレ』もできるね。トイレになれる。でもあれは抵抗があるかな？ おしっこ、飲める？」

「あ……おし……？」

「そう。おしっこ。教材だから全く知らない人のってわけではないけど、抵抗があるかな」

「わかんなっ……あああっ……うんちっ」

「……そうだね、ちゃんと我慢できて偉かったね」

もう限界だよ、とお腹を撫でると夕が泣きながら声を上げた。

「出したいいっ」

「うん……上手に我慢ができてきたからそろそろ最後の一本を入れてあげるね」

く  
く  
く

寝室のベッドの上、足を大きく開いた夕の陰部を冷たく見下ろす。

「イっちゃいけないよって言ったね？」

「はい…………ごめんなさい…………」

今日は尿道の形の確認だった。柔らかいカテーテルと違い、金属製のブジーは人によっては上手く入らないことがある。そのためカーブの角度や長さ等、夕に合うものを調べていたのだ。そして試すこと三本。一本目と二本目は合わなかったようで、痛みと苦痛と、けれどその虐げられるような感覚に悦び夕は咽び泣いた。

そして今の三本目。ペニス部分を抜け、付け根のカーブする部分。そこに差し掛かった瞬間、夕はこれまでとは違う喘ぎ声を上げた。そして夕にイかないようにと指示をしたのだ。そのときは先の二本で疲れた身体を強引にこじ開けられる快感に泣きながらも分かりましたと返事をした。それなのに、イっ

「まだこのおちんちんは悪いこだね」

「はい…………いいこになれなくてごめんなさい」

「大丈夫、そのうちちゃんといいこになれる」

以前、いいこでも悪いこでもいいのだと伝えた。それから少し、夕は「悪いこ」であるペニスも好きになってきたらしい。

「はい…………お仕置き、お願いします」

せっかく尿道責めをしていたのだから、と三本目と同じタイプの別のブジーを入れることにした。けれど見た目は殆ど変わらない。だから夕も不思議に思ったのだろう。

「あの…………それは…………？ さっきのじゃないんですか」

「ああ…………形も太さもほとんど変わらないから大丈夫だよ。でも危ないから手足を縛っておこう」

「え…………？」

危ない。その意味を夕が考えている間に簡易ベルトで左右それぞれの手首と足首を繋いでしまう。そうすることで小さく丸まらない限り夕は足を閉じることができない。

「…………ふむ…………」

恐らく強引に丸まることはないだろうが、丸まってしまうたら肝心の『お仕置き中のペニス』を撮ることができなくなってしまう。このペニスでいられるのもそれほど長くないことを考えると、新しいお仕置きときは特に動画で残しておきたかった。

「……これも使おう」

少し考えた末、玩具の入った棚から出した一メートル弱の棒。手足を縛ったベルトも、このフック付きの棒も全て自前だ。博物館としては準備に必要なものとしてカウントしていない物。単純に、自分の趣味。

「あ……それ……」

「こうして足首のベルトにつければもう、棒が邪魔して閉じられなくなるんだ」

棒の両端についたフックをベルトに接続し、棒を持ち上げる。すると楽にちんぐり返しすることができた。

「あっ……やあっ」

「嫌っ」

「……ごめんなさい……」

すぐにごめんなさいが言えるところも夕のいいところだ。悪いと思えばきちんと非を認めることができる。

「ああ……よし、じゃあブジーを入れるよ」

「はい……宜しくお願いします」

股間が痛くなる挨拶を聞き、それから一度も使ったことのないブジー——エレクトロブジーを尿道に入れていく。

「あっ……ん……」

「お仕置きでも感じてしまう悪いこかな」

「あっ……ごめっ……あっ」

最初こそ痛みに涙していたけれど、夕はもうすんなりとブジーを飲み込めるようになっていた。それに尿道を擦られる感覚で気持ち良くなることもできる。

「ここだ……さっきはイってしまっただが、次は我慢できるかな」

「はい……もしイったら……お仕置き……」

「夕。違うだろう？ これがお仕置きだよ。もうこれ以上のお仕置きはない」

「あ……ごめんなさい」

お仕置きでイってしまうようならそれはもうダメだ。そもそもが「イかないように」という言いつけを破ったお仕置きなのだから。

「イかないようにするから……」

夕はもうすでに泣きそうになっていた。でもこの顔は恐怖や不安でする顔ではない。少しの期待と興

奮、そして反省からの顔だ。複雑。

「……必ず耐えなさい」

尿道口から飛び出したブジーをつまんでゆっくりと動かす。たったそれだけで、夕は苦しそうな声で啼いた。

「あつ……あああああ！」

それから少し力を入れて前立腺を突くと、夕はビクンビクンと動かない身体を必死に跳ねさせた。それでもなんとかイくのは耐えているらしい。

「前立腺、気持ちいいな？」

「あつ、ああつ！ 気持ちいいっ！」

「うん、夕はまだ気持ちいいことをたくさんは知らないから、きつと快感に慣れていないだけだと思うんだ。だから気持ち良すぎるものに慣れておけば、軽い刺激だけでは物足りなくてイけなくなると思う。だから前立腺の快感を知ったばかりのうちに強い刺激に慣れてしまおうね」

「あ……え……？」

今日が初めてのブジーだった。やはり導尿用のカテーテルとは刺激の感覚が違う。いくら尿道責めに慣れていたからとは言え、初めてですぐにイってしまうというのは敏感過ぎる気がした。

「……大丈夫、放置したりはしないよ。ちゃんとずっと、ここにいるから」

「あ……や……何……？」

何をされるか分からないというのは怖いだろう。でも展示品はこれ以上に何をされるか分からない状態なのだ。

「……おめめ見えないようにしようか」

「あ……嘘……」

「夕は教材だけど、展示品は見えないんだよ。それに聞こえない子もいる。誰に何をどうされるか分からないままずっと耐える……そのつらさも理解して、その気持ちも含めて黒服に教えるのが夕のお仕事でしょう」

「あ……はい……」

その為に、寝室の隣にあるプレイルームには実際に博物館で使われているセットが一通り揃っている。ジューサーや尿道責めの箱、それから仕切り板が下りる設計になった展示コーナー用の台と足置き。こちらは博物館ほどの防音にはなっていないけれど、ここを使うのは黒服と展示品だけだからそもそも防音の設備は重要ではないのだ。

でもまだそこは一度も使っていない。まずは身体を慣れさせて、それからプレイルームで体験し、そ

して勤務開始となる。

だから最初は、アイマスク。

「……耳痛くない？」

「はい……大丈夫です……真っ暗……」

「うん、ジューサーも尿道責めも箱の中は真っ暗だからね。真っ暗で、何も気を紛らわすものがない状態で自分の身体を弄られる感覚に耐え続けるんだよ」

「あ……ああ……」

「……悪いおちんちん。想像だけでびくびくしてるよ」

「あ……ごめっ……」

「大丈夫、壊れるんじゃないかってくらい強い刺激で、おちんちんの中麻痺させちゃおうね」

「え……何……や、こわっ、こわいつ、あ、あああああ！！！」

約5万6千文字です。

宜しくお願い致します。

ツイッター

@gooneone11